Title	カール・バルトのフォイエルバッハ論
Author(s)	滝沢, 武人
Citation	基督教学, 13, 76-86
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46343
Туре	article
File Information	13_76-86.pdf



カール・バルトのフォイエルバッハ論

滝 澤 武 人

間項>的地位を無視したり軽視したりしているものが意外に多いのである。(エ) 論者」とされその哲学は、 試みが存在していると思われる。 根本的には結合するものとして、 論者の 〈中間項〉的意義は適確に把握され十分に評価されてはおらず、むしろマルクス主義者の著作においても、 間項>となっていることは一般に認められよう。 あるがままにとらえているとは思われない。 ながら、 フ (しかし基本的には不十分で否定さるべき) キリスト教神学や宗教論としてさまざまに解釈されてきた。 ーフォイエ ンフォ それらはどのような立場からの解釈であれ、 ールバ イエルバ ッハ ルバッハを自然主義、 が ッ ハ解釈の傾向と密接な関連を有するものであろう。 ヘーゲ あるいは生の哲学、 ル左派に属しており、 プロテスタント神学者や宗教哲学者によるフォイエルバッハ解釈(反論と対決) その結果として、フォイ 人間主義の立場におしとどめ、唯物論者たらしめまいとしている」一般の(2) 船山信一によれば、 あるいは観念論的人間学、 しかしながら、 ^ 1 フォイエルバッハ哲学を何らかの形でねじまげており、 ゲルからマルクス、 ュ ルバッハは「観念論者によってもっとも優遇される唯物 「当時はもちろんのこと、今日に至るまで、キリ 大井正が指摘するように、 あるいは実存主義、又あるいは一つの新ら 更に、そのようなフォイエルバ そのような事態は、 ェ ンゲルスにい たるまでのい フォイエル 梅本克己が強調する バ ッ わゆる その ハ解釈と それ のその

稿を待たねばならないが、おおよそ以上のようなフォイエ 教界は彼の批判に対して充分に答えていない」し、 ここで特にバルトによるフォイエルバッハ論を取りあげるのは、さしあたっては、バルトがわれわれの世紀を代表す なものとするために、 う分野において検討し直し、受けとめ直すという作業は一つの重要な課題となるであろう。その本来的作業は他日 かつ極めて重要なものと考える。フォイエルバッハのキリスト教批判・宗教批判を、特にキリスト教学・宗教学と したがってまたその宗教論をも安易に「片づけ」てしまった」だけなのである。私は、 「彼の批判を充分に汲み取っているとはいえない」のであり、「マルクス主義者たち」は、 本小稿においてはカール・バルトのフォイエルバッハ論に多少の検討を加えようと考える。 他方マルクス、エンゲルスを初めその後のマルクス主義者たちで ルバッハに対する視点に基づきつつ、その視点をより明 船山のこの指摘を正当 っフ オ 1 確 の

ルバッハに関する一章が含まれている。 発表され、後にその講義全体に「前史」を付して出版された著書『十九世紀のプロテスタント神学』の中にフ(6) ほとんど認められない。従って以下においては、 のプロテスタント神学史』がもとになっている。それは、先ず一九二七年の『時の間』(Zwischeh den Zeiten) る神学者たちの一人であるというにすぎない。 トのフォ 1 エルバッハ論は、一九二六年夏学期のミュンスター 後者の分量は前者の約五分の一に短縮されており、 前者のみを考察の対象としたい。 大学における講義 『シュライエ 内容的にも新しい ル 7 誌上 叙 ·以後 述は 1

びに哲学的思惟との激しい苦闘とによって、一九三〇年頃に現われたバルトの思考における「真に決定的な移行」 (a) 「弁証法的 :『ロマ書』(一九一九年)から『知解を求める信仰』(一九三一年)へのいわばへ過渡期>の段階にあり、 フォイエルバッハについて論じた時期のバルトをあらかじめ一瞥しておこう。 ?から教義学的思考へ」の移行期として、全歴史にわたる教義の研究お よび特に十九世紀 この時期は、 の神学的 極めて重要な なら

めざすものであったとえよう。

そしてフォイ

・エルバ

ッハとの関連でつけ加えるならば、

<宗教社会主義運動>との

断

どのような関係を有しており、バルトがそのような哲学者をどのように評価するのか、ということははなはだ興味深 たぐいまれな熱情をもって「反神学」(Anti-Theologie)を事とした哲学者である。そのような哲学者が神学 バルトのフォ はあるが、十九世紀のプロテスタント神学に対して激しい批判(否定)をなしているということであろう。そのためはあるが、十九世紀のプロテスタント神学に対して激しい批判(否定)をなしているということであろう。 らに唯物論者というような、 ではなく、 確 カュ にフォ フォイ 1 イエ 一その際先ず確認すべきことは、バルトもフォイエルバッハもともに、もちろん全く異なる見地からで 工 ルバ ルバッハ論は、一般の純護教的神学者たちのように、「無制限に皮相」で、「ばかげた陰険な諸 ı. ルバ ッ ハ ッハの業績の積極的な意味を一応は正しく評価しているのである。 は 神学からは一番遠く離れた片隅」に記されている哲学者であり、 哲学年鑑に 「観念論者」としてではなく、むしろ「感覚論者、 又その生涯にわたって 実証 主義者、 の歴史に はさ

年)、そして『宗教の本質にかんする講演』(一八五一年)の三つである。そのバルトの要約を再要約する紙幅はない 意味する」ことを強調する。ここでバルトは、「哲学者」であるフォイエルバッハを「神学」者に、その「反神学」の(『) をもって」属すべき人であり、更に彼の反神学が「近代神学の問題設定の内部におけるあるきわめて重要な可能性を トが取りあげるフォイエルバッハの著作は、『キリスト教の本質』(一八四一年)、『将来の哲学の根本命題』(一八四三 「哲学」を「神学」たらしめんとして、フォイエルバッハの教説をかなり詳細に要約・紹介して行く。 単なる懐疑家でも否定者でもない」のであり、 先ずバルトは フォイエルバッハの教説を神学者仲間に対して諄諄と語 り聞 かせるが如くである。 即ちフォイエ フォイエ ルバッハが近代プロテスタント神学の仲間に「内面的にも実質的にもたぐいまれな正当性 むしろ感激と情熱をもって「然り!」(Ja!)と言っているのであり、 その際、 ルバッ バル は

んして気ままに決定を下すようなものは何も存在しない」ということなのである。次に、そのようなフォイエ それ以外の何物でもない。フォイエルバッハ自身明言しているように、「私の教説の一つの帰結は、いかなる神も存在 しないこと」即ち、 もない。ましてや「救済論」や「神学」と呼びうる可能性は全く存しない。そしてそれは、又「無神論」でもあって、 をバルトがどのように近代神学の歴史の中に位置づけようとしているかを見て行こうと思う。 「自然および人間から区別された抽象的非感性的な存在者であって、 世界および人類の運命に ルバ

Ξ

ルトは、フォ

ィ

÷

であることを指摘する。即ちバルトによれば、シュライエルマッハー、および彼以後の神学に共通の方法的出発点は(゚ス゚) 「宗教・啓示・神関係というものは人間の一つの述語として 理解されうるものなのか、またそれはどの程度可能なの と」であるにしても、それが「フォイエ ルバッハを取り囲んでいた神学」に対する正当な「一つの問い」(eine Frage)

ルバッハがキリスト教に対して語る言葉というものが「ほとんど悪臭をはなつほどに卑俗なこ

か

いたのか? そして近代の神学者は真に自覚的に人間の神化を企てているのか? フォイエ トがその世紀の神学を批判の対象とする作業において初めて本来の問いとして明確に認識されるようになったと言い N フ ヾ ・オイエルバッハの問いを、彼自身とその時代の可能性への問いとして問わざるをえないのである。 ンのような人々、又更に、 は ッハの問いは、その世紀の神学によっては十分に聞かれも理解されもせず、バルトによって初めて、つまりバル フォイエルバッハと同時代の人々のみではなく、バルトによれば、彼以後のシュヴァイツァ リッチュルやハルナックに至るまでもつづいているのである。それ故に、バ(si) ルバッハのこの真剣な問 1 中口 確かにフォ 1 ルトはその テやホ 1 フ

バ にではなかった」と主張する(20) ター派正統主義の教義の中に固定化されていったのであり、「ドイツ福音主義神学」が生まれたのは、 ッハが特に好んで引き合いに出すルター自身にかかわる問いであること。バ その問 は フォイ 単 - にシュライエ ルバ ハへといたる路を開いた萌芽は実はルターの教説の中にあったとし、 ル 7 ッハーに代表される「近代神学」だけにかかわるものではなく、 ルトは、 ルターの特に信仰論と受肉論 それがやがてル 一良き星のもと フォ 1 ル

フォイエルバッハのその問いを「重要で切迫したもの」にしている理由として次の三つを指摘している。

この点におけるバルトのフォイエルバッハ理解は鋭く、正当なものであると言えよう。そして更にバ

うるであろう。

80

さに「人間の神化」をめざしているのではないか、とバルトは問う。 であり、唯心論的に人間の精神や心や良心や内面性だけを問題にする人は、真に神を問題にしているのではなく、ま anthropologische Realismus) に基づくキリスト教教義学の解明。 それは古いキリスト教の伝統と結びついているの フォイエルバッハの断固たる「反唯心論」(Anti-Spiritualismus)、 積極的に言えば「人間学的現実主義」(der

悪意にみちた抵抗」という役割を演じていたのである。(%) れば、 キリスト教会(および一般市民階級)は、その戦いの正当性と必然性とを全く何も知らず、 むしろ、「緩慢で無知で Ξ フォ フォイエルバッハによる宗教の人間学化は、 1 工 ルバッハの学説が社会主義的労働運動のイデオロギーと「親縁関係」を持っていること。バルトによ 解放の一部であり、解放戦の一部であった。そして、その当時の

ト教の伝統と結びつくものとは思われない。 これらのうち、 一と二は事実としては正しい指摘であろう。 だが二のフォイ 工 ル バ ッ ハ 0) 「現実主義」 が、 キリス

四

そうするとその「刺」は、「高慢にならないように、わたしを打つサタンの使」にすぎないのである。それは、単にその 言葉において表現するときに典型的に明らかになっていると思われる。 われる。それは、バルトがフォイエルバッハを「近代神学という肉体の中の一つの刺」(ein Pfahl im Fleisch)という 「肉体』をよりよく生かすために「与えられた』ものであり、単に「痛み」が残るだけなのであろう。しかしながら、 以上、 イエ 一ルバッハ出現の必然性をあざやかに示し、その業績の積極的な意味を正しく評価しているとは言えよう。し(※) ルト その作業は同時にフォイエルバッハを近代神学の歴史という枠の中に閉込めようとする試みであると思 . の フォイエ ルバッハ論を簡単に紹介してきたのであるが、 もちろんこの用語はパウロのものであるが、 確かにバルトは、 近代神学の歴史の中での

目標である」という見解が、又「人間的実存とその要求・願望・理想の正当性と確実性」 由づけもなしに確立されていることから生まれてくるのであり、 「彼を単純に面と向かって笑うこと」が必要だというのである。(%) は、 フ . オ 1 ルバッハの「人間は一切の事物の規準であるだけではなく、 まさにこのような「批判」には反論する必要もない 更にその「浅薄な」宗教解釈に打ち勝 一切の価値の総体であり根源であり についての見解が、 つには 何 何と !の理

ルバ 込んで考えたものはないといっても過言ではなかろう」と思われる。 が をも知らない者であり、 強調するように、 はキリスト 恥 知らずの 神学者バルトによる全く的外れな 実は ・教神学者によって死を知らないともいわれるのであるが、 いフォ そのような人間観から「神の本質は 次にバルトによれば、 (神と人間とを) 1 工 ルバ . ツ ノヽ が、 同 「生涯を通して彼の哲学的思索の対象にした問 一視する神学」(die unverschämte Identitätstheologie) 「批判」と言えよう。 ルバッハは 人間の本質である」という「あらゆる幻想中最も幻想的 例えば これは誤りであって、 「死」の問題については、 題 であり、 彼ほど死 をつくるので 船山 フ オ 信 1

最後にバル

}

は

フ

オ

イ

_

ル

べ

ッ

の宗教解

としか言いようがない。

フォ

イエ

「悪と死」を知らない者、

従って「人間

の本質

である。 が ともこのような「批判」こそが代表的な「護教」にほかならないことは田川建三があちらこちらで力説している通り ながら、そのような「宗教」とは別の「新らしい宗教」、「真の宗教」などはどこにも全く存在しないのである。 -教の>宗教」に対する限り、「全く正しい」ということを承認できるような態度こそが必要であると説く。 「悪しき死すべき人間の経験としての宗教」であり、このような人間の「<高級な>、<重みのある>、 <キリス しかし

からそのような「神」を何とか鋳造しようと思えば不可能ではないのだが。この辺で本稿を短くまとめよう。 特にブルーンの著書 (W. Bruhn, Vom Gott im Menschen, 1926) への批判をなしている。 オ バルトは、このようなフォイエルバッハへの「批判」を強化するつもりでか、長目の「 ルバッハがそのような「人間の内なる神」をつくり、信じているのではない。もちろんフォイエ 「論争的あとがき」 しかしながら、 ルバッハ もちろんフ にお

75

たい。 い。42 つの時代」(eine Periode) を形成しており、 史をながめるならば、 は同様の「かかえこみ」がなされてきたのであるが、その護教意識はより一層強化されていると私は判断せざるをえ をなしている。「肉体の中の一本の刺」としてかかえこもうとするのである。その後も、「世界的規模で一種の して史上最後の?)キリスト教護教家」である。バ 教復興をひきおこす力となっていった」このバルトの後継者たちによっても、(42) 川 そして思想史的にも、 「建三の言葉を借りるならば、 バルトはそのフォイエルバッハ論においても、「近代キリスト教史上最大の(そ 確かにシュライエルマッハー以来のプロテスタント神学は、ある一つのまとまりを持っ 本稿の冒頭に述べたような 基本的には、 ルトは、 「かかえこみ」が進行しつつあると思われる。 今日のわれわれもなお依然としてその「時代」の中を生き フォイエルバッハに対して巧妙な「宗教的 フォ ィ ____ ルバ ッ ハに対して基 巨視的 かかえこみ」 キリス

ぎつけるべき時なのである。(5) その「時代」の大きな流れの中につつまれ流されていたものと言えよう。しかしながら、その「プロテスタント時代」 ているのである。 求められるべきではあるまいか。 今こそまさしく、「フォイエ は急速に「終焉」しつつある、と私にも思われる。そうだとするならば、その「時代」の神学の奥義をあばきだした 「探偵」たるフォイエルバッハをこそ足がかりにして、キリスト教批判・宗教批判を学として更に徹底させる道が探し 「われわれの世紀のあの大いなる神学者たちの、半世紀にもおよんだあのさまざまな神学的試みも、 ールバハ の唯物論に内在するぶきみな力」をもう一度嗅

許

- (1)大井正『マルクスとヘーゲル学派』福村出版、 ハの役割」(四八~九八頁) を参照 一九七五年、 五〇頁。 特にその第二章 「唯物史観の形成過程におけるフォ 1 ____ ル
- 梅本克己『増補・人間論』三一書房、一九六四年、二〇頁
- (5) (4) (3) (2) 同書、二九頁。
 - 船山信一訳『フォイエルバッハ全集』第九巻、 福村出版、一 九七五年、「解題」、三二八頁
- . 『全集』第一四巻、一九七六年、「解題」、三〇四頁
- (6) und die Kirche, 1928, S. 212-239. にも再録されている。 九六三年に、井上良雄による良訳(九五~一二〇頁)と「解題」(三六三~三六四頁)がある。 . Barth, "Ludwig Feuerbach", in: Zwischen den Zeiten, 1927, S. なお、 世界思想教養全集二一『現代キリスト教の思想』 11-40.なお、 同論文はバルトの論文集 河出書房新社
- (9) (8) (7) トーランス『バルト初期神学の展開』吉田信夫訳、新教出版社、一九七七年、第四章(六二~二〇八頁)を参照 ders., Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert (1947), Siebenstern 1975, Band 2, S 457-462
- 同書、二〇九頁
- (10)Barth, in: Zwischen den Zeiten, 1927, S. . 11., 井上訳、 九五頁
- (11)トーランス、 前掲書、
- 特に『キリスト教の本質』(一八四一年) に対する批判への、 フ ノオイ ż ルバッ ハ自身による反論は、 「『キリスト教の本質』 K

する或る神学的評論の解明」(一八四二年)、「著書『キリスト教の本質』 の評価のために」(一八四二年)、そして「『キリスト教の

本質』第二版への序言」(一八四三年)などの中に見られる

Barth, op. cit., S. 12., 井上訳、九六頁。

ibid., S. 12-21., 井上訳、九六~一〇七頁。

(15) (14) ibid., S. 16., 井上訳、一〇〇~一〇一頁。

ibid., S. 13., 并上訳、九七頁。

ibid., S. 16., 井上訳一〇一頁。

(17) (16)

(18) フォイエルバッハ『宗教の本質にかんする講演』、船山訳 『全集』第一一巻、一九七三年、二一八頁。W. Schuffenhauer (hrsg.)

同書、二一五頁。ibid., S. 28-29 Ludwig Feuerbach gesammelte Werke 6, 1967, S. 31

同書、二一八頁。ibid., S 31.

(19)

(22)(21) (20) ibid., S. 22., 井上訳、一〇七頁 Barth, op. cit., S. 22., 井上訳、一〇七頁:

ibid., S. 23., 井上訳、一〇八~一〇九頁。

(23)

ibid., S. 24., 井上訳、一一○頁。なお、本稿の註20を参照。 ibid., S. 23-24., 井上訳、一○九~一一○頁。

(25)(24)

(26)ibid., S. 24-26., 井上訳、一一〇~一一二頁。

ibid., S. 28-30., 井上訳、一一四~一一七頁。 26-28, 井上訳、一一二~一一四頁。

ibid., S.

井上良雄、前掲書、「解題」、三六三頁。

(29)(28)(27)

(30) Barth, op. cit., S. 26., 井上訳、一一二頁。

コリント後書一二、七。

(31)

例えば、本稿七九頁

Barth, op. cit., S. 30-33., 井上訳、一一七~一二〇頁(

ibid., S. 30., 井上訳、一一七頁。

— 85 —

- (35)ibid., S. 31., 并上訳、一一八頁。
- (36) ibid., S. 31-32., 井上訳、一一八~一一九頁。
- (37)死を忘れている現代において、 船山訳『全集』第一六巻、一九七四年、「解題」、 フォイエルバッハの死および不死の思想は大きな意義を持っているのである(四二九頁)。 四二八頁。船山によると、観念論者は死を観念的に問題にし、 唯物論者は
- (38)田川建三『立ちつくす思想』頸草書房、一九七二年、「宗教的かかえこみ」(二四六~二七八頁)を参照
- (40)(39)

Barth, op. cit., S.

33-40

(41) 田川建三『批判的主体の形成』三一書房、一九七一年、一六五頁

本稿註(38)を見よ

- (42)Geburstag, 1956, S. 596-609, ders, "Der Atheismus", in: Evangelische Theologie Heft 3, 1958, S. 112-122, H. Gol-代表的なものとして、J. M. Lochman, "Von der Religion zum Menschen", in: Antwort, Festschrift zu Karl Barths 70
- 37-55, ゴルヴィッツァー『マルクス主義の宗教批判』松尾喜代司訳、新教出版社、一九六七年、五七~八四頁、又、ガイヤー『現 lwitzer, "Die marxistische Religionskritik und der christliche Glaube", in: Marxismusstudien 4, 1962, S. 1-143, S
- (43)Barth, Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert, Band 1, S. 19., バルト 『一九世紀のプロテスタン神学 (上)』 佐 代神学の状況』寺園喜基・森泰男訳、日本基督教団出版局、一九七八年、「無神論とキリスト教」(三五~七七頁)、などがある。

-- 86

- (44) さしあたっての説明として、 藤敏夫訳、新教出版社、一九七一年、十六頁。 最終章「プロテスタント時代の終焉から」(二四一~二七九頁)を参照。 ツァールント 『二〇世紀のプロテスタント神学 (下)』 新教セミナー訳、 新教出版社、一九七八年
- (45) メーリング . 『ドイツ社会民主主義史 (上)』足利末男・平井俊彦・林功三・野村修訳、ミネルヴァ書房、 一九六八年、 九七頁。
- 九七七年度文部省科学研究費·奨励研究 (A)による研究成果の一部中間報告である。